

読切連載 八方鬼門 第二回

大とし

ばやし

三種

野坂昭丸

挿繪 井上洋介

昭和四年三月
六日

99



世の中には、妙な暗合と申しますか、めぐりあわせと申せばよろしいのでしょうか、決してこじつけではなく、偶然のつづきがございます。

早いもので、もう何年前になりますでしょうか、群馬県に大久保のボクちゃんなんて人物がおりまして、やたら、婦人を殺しては、穴の中に埋めました。一口にこの埋めると申しましても、昔から土方の一人前というのは、縦横深さそれぞれ一メートル掘ることをいったので、なまなかなことではないかもしれません。

まあ関東ローマ層のやわらかな土だったからできたのでしょうか、婦人とはいえ、一人の人間を殺して、ナニして、さらに埋めるとなりやたいへんな体力を必要といたします。

異常といってもいくらいなもので、精神面だけではなく、こっちの分野についても、鑑定を行う必要があるのではござんせんかな、ボクちゃん日頃の献立てなど、疲れたサラリーマンには参考となるにちがいない。

とにかく、ボクちゃんがせつせと穴を掘っていたすぐ近くで、今度は、赤軍派なんてのが穴を掘りまして、都市銃撃戦

に備え、作戦を練ったといえます、いやそうじゃなかった、総括とやらの後始末のために、穴を必要としたんだったわけ、警察は、新聞記者を集めた上で、これみよがしに死体を掘り出してみせました。

あれあれといううち、アナがアナをよぶと申しますか、南洋の観光島グアムの穴から、横井庄一さんがとび出してまいりまして、穴に関係のある事件が、こうたてつづけに起るといふのは、不思議な感じもいたします。

今度だつてさよでございます、今年の二月二十日、ルバング島に小野田さんがあらわれたかと思うと、二十八日、八王子の雑木林で、関京子嬢の死体が発見されたのです。

二度あることってえまずから、今度、死体だか、旧軍人だか、一方が出て来たら、残る一つの出現を予言してみるといいかもれません、ノストラなんとかの言葉よりは、当りますよ、へえ。

しかし、あたくしの申し上げますのは、穴の話じゃないんで、アナアナなんてえな、もう古うございませよ。小野田さんのことについて、以前からおよそ事情が判っていたそうですが、これでまだ南洋の島々には、沢山の旧日本軍兵士が残っているらしい、そして、発見されながら、救出されないでほったらかしの場合もあってえます。

とある南の島でございます、うっそうと繁って昼なお暗いジャングルの奥、もとより人跡未踏、いや、これは正確じゃ

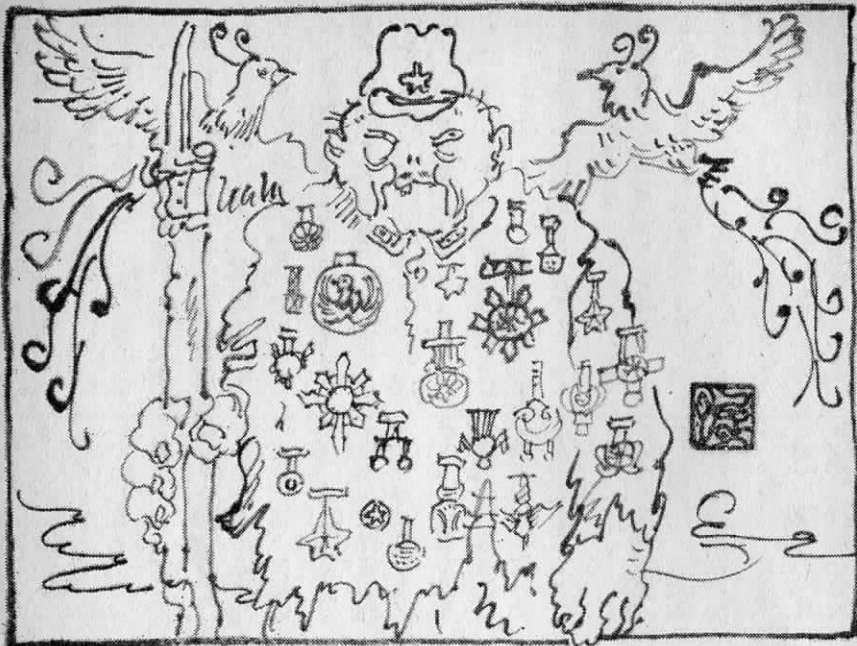
ございませんな、そこに実は十名ほどの旧日本兵が棲みついております。

御多分に洩れず、アメリカ軍の猛攻を受け、ここへ逃げこんだまま、戦争の終わったことを知らず、ひたすら軍人勲論だか、戦陣訓だかの教えを信じ、帝国陸海軍再攻の日を待ちつづけ、日夜訓練にいそしんでおりましてな。朝は起床ラッパに目を覚し、一つ軍人は忠節をつくすを本分とすべしなんて、奉誦するんで。

規律を重んじ、整理整頓を心がけ、十名とまとまれば、軍隊として小さいながら一つの単位を構成しますから、それぞれ任務を分担し、隊長の命令を、チンの命令として、服従してまいりました。

しかし、長たるもの、命令するばかりじゃやはり具合いがわるい。これでもし、敵でもあらわれ、抜群の能力をみせりゃ、部下も心服するだらうけれど、ジャングル内での原始生活では、なまじ陸士出身など、能なしの部類なんで。

やはり釣りがうまい、服のつくりを器用にするなんてえ方が重宝がられます、なんとか威を保つために考えたのが位階勲等ってんですか要するに地位を上げてやることです。「内藤上等兵、本日付きをもって、兵長に任ず」なんてやれば、そこは兵隊ですから、単純によるこんでしまう。イノシシを射止めた、南洋にこんなものがあるかどうか知りませんが、とにかく食糧確保に勲功をあらわせば、功七級が六級に



進級する、口先だけじゃありがたみがすくないっていうんで、隊長は、飛行機の部品や砲金を集め、磨いたり削ったりして、それらしい肩章や、勲章をつくり、その贈呈式を行った。

もちろん、隊長自身も、お手盛りで出世いたしました。ジャングルに逃げこんだ時は、二十二歳で中尉だったんですが、戦時規定に従い、三、四年で一階級昇進させたわけです。二十六歳では大尉、本来ここで陸軍大学校へ入るべきところですが、いちおう略しまして、三十歳にして少佐。部下に相応に、当初一等兵だった者も、曹長となっております。

曹長ともなれば、軍隊で一種の貴族みたいなものといいますがジャングルでは下がない。相変らず使い走りを追われ、しかし、みな満足しておりました、ありていにいえば、隊長だって、働く時は一緒に汗を流すので、内容はそう変ることになかったといえます、そりゃそうでしょう、ジャングルの中で、いちいち階級をいい立てたってしかたのないことですから。

しかしまた、だから階級が昇進することも必要だった、何の実質をも伴わない出世ですが、金ピカの勲章や、あたらしい肩章を身につけることで、空しい明け暮れを支えたのです。

隊長が五十歳になった時、功一級勲一等菊花大綬章を有し、位は元帥でした。はじめ軍曹だった兵士は、功二級勲三等で中将、いちばん下の位ですら、中佐で、全員が、東郷元帥の

ポツダム進級で、一つ上にあがったんだそう。

「少佐の分際でその態度は何か」一喝されて、プロはびっくりしました。そして、ついふり向くと、そこには服装こそ粗末だが、襟に大佐の階級章をつけ、きらびやかな略章さえかざった男が、銃をつきつけている。

プロはやはり旧軍人でした、自分より上級者と気づいたとたん、五体硬直してしまい、「お迎えに上りました、大佐殿」挙手の礼を行ったといえます。

大佐は、伝達書を一読し、鼻で嗤って、ほうり投げました。「偽物だこんなのは」「申し上げます、戦争は残念ながら敗けに終わりました。しかし大佐殿の忠誠心は、一億こぞってこれを賞讃するところであります、どうか心安らかに御帰り下さい」「この島の、守備隊長をとなたと心得る」プロも、答えようがない、立ちつくしていると、横合いから、「私だ」貫禄十分に隊長があらわれた、そして、プロは眼がつぶれるかと思ったそう。

元帥と少佐なんていったら、天地雲泥の開き、通常は顔を見ることもかなわなかったといえます。「山下もえらくなつたもんだな、元帥である私に、命令を伝達しようというのか」隊長おっとりいって、伝達書をふみにじりました。

「申しわけありません」プロは脂汗を流しつつ、なんとかこの場を逃げ出したいと考え、「出直してまいります」必死でいいました。「私の直屬上官にお出ましねがおう、そうすれ

肖像画の如く、胸一面に勲章を飾り、重々しい足どりで、ジャングルを歩きまわっていたのです。

そこへ、ジャングルを開発して、レジャー基地となすべく、日本の企業が進出してまいりましてな、すわ敵襲とばかり、一同、錆一つない三八式やら九九式の銃をかまえ、迎撃の態勢をととのえて、様子うかがったが、どうもおかしい。

そのうち、開発する側も気がつきまして、いや別におどろきもありません、「またいるらしいよ」「いいじゃないか、宣伝にもってこいだ」「しかし工期が長びくねえ」「大丈夫だよ、救出の専門家がいるんだから」度重なることで、みな慣れていますな。

救出のプロというのは、一、三人でジャングルへ入りこみ、往年の方面軍指揮官の名を名乗り、戦闘の停止、本隊へ合流の指示を与えるチームでしたな、もちろん旧軍人が引き受けました。

この島にもそれがやって来て、こちらからは探そうとせず、旧兵士たちが先に発見するようしむける、マイクやビラは、どうせ謀略とみなされるだろうから、使用しないそうですな。「そこにいるのは誰か」プロの一人がのんびり焚火していると、背後で鋭い声がしましたな、いよいよ出たよとばかり、「自分は、比島派遣軍司令官山下大将の命令で伝達書を持参した者だ」「そのまま官位姓名を名のれ」「陸軍少佐谷口保夫」これは嘘じゃないんで、たしかにこの男、敗戦の時には大尉、

ば、その命によるこんで従う」「はい」「復唱せんか、少佐」「はい」周辺には、中將や少將がうろろいるので、元少佐がうろたえきつたのも無理ないこつてす。

「元帥の直屬上官といったら誰だろう」プロの報告を受けて、日本の知識人たちは考えました。「そりゃ、きつと大元帥陛下さ」元帥より上はないのだから、そういう勘定になる。

小野田少尉の時には、上官がルバング島へ出かけた、つまりヒューマニズムというんでしょうな。しかしジャングルの奥の将星たちは結局、そのままになりました、まさか、大元帥陛下に、お出ましいただくわけにもいかなかったから、す、いくらなんでもね。

あたしなんぞ軍隊のことによるで素人の者が考えても、小野田さん、いや横井さんが元のままの位階というのは解せませんねえ。南の島に残留している兵士たちにとって、戦争は三十年以上、いやまだ続くというなら、小野田少尉はすくなくとも少將、横井軍曹殿なら、少佐に昇進させて上げましょうよ、それが、武士の情ってえもんじゃありませんかねえ。

その2 再軍備

いったいに政治家てえものは、自分の足もとが危くなると、



世間の眼を外へそらせようとして、いろんなことを画策いたします。まあこりやしかし、私どもも、時に利用する逃手でして、「どうするのよ、来年は坊やも高校よ、少しは考えて下さいな。いつまでも麻雀だゴルフだって、出歩いてばかりいないで」なんてんで、この山の神がヘソを曲げております時に、「そうそういえば、去年、息子が教育大付属駒場高校へ入ったって喜んでた平野君ねえ、どうやら癌らしいよ」と、話題をそらしてしまふ。

他人の不幸はなんとやらで、細君たるものたちまち機嫌を直し、もつともうわべはさも同情したふりで、あれこれ質問しかけ、あげく、「なんたって、あなたは黒柱なんですから、体に気をつけてもらわなくっちゃ」と、しごく円満におさまります。なに平野氏のその後なんぞ気にしやしません。小野田さんなんてかたは、これですい分お上を助けてるんじゃないでしょうかな、諸物価高騰の折から、世間の不満は、はちきれんばかり、しかも何の手もうとうとしない。いろいろまやかしの策は講じてるようですが、新聞、TV、週刊誌何をみても、お上を攻撃の文章ばかり目につきます。

そこへ南洋のお噂が届いた、それってんでマスコミは方向転換、ルバング島が何よりの関心事で、議会における与党野党のやりとりなどすみっこに追いやられてしまった。

多分、これに味をしめたんでございましょう、妙にお上は、以後未帰還兵と申しますか、いまだに敗戦を信じない旧日本

兵の搜索に熱を入れるようになりましたな、どうもこれは解せないこととございます。

死んだもの貧乏とでも申しましょうか、まあ敗けいくさの犠牲者など、どこの国でも同じことかも知れませんが、これまで戦没者の慰霊とか傷痍軍人の補償には、まことに冷淡だったのが、急に態度が変わりまして、「南の島において、未だに皇軍不敗を信じ、戦闘状態を続行させている旧日本兵を、このまま放置しておくことは、人道的立場からも許されない、是非とも救出するべきである」と、唇のひんまがった首相が提案し、もちろん世間も了承いたしました。

たしかに人道主義的見地からいえば、文句のないところでげすからな。予算も組まれましたし、大々的な搜索隊が南洋の島へくり出しまして、いろんな情報を送ってまいります。

現地人と結婚している兵士の噂やら、こわれた零戦の部品を集め、組立てて出撃の機をうかがっている航空隊のお話、日本内地にいる者からも、さまざま意見がでまして、ちょっとした宝探しの按配、いざ探すとすれば、なかなか見当らないものがございますが、個人でジャングルへもぐりこむ人もあらわれました。鈴木さんのように、うまくぶつかればパイロンも及ばぬ即席の有名人になれますからな。

それでもポツリポツリと、旧兵士はあらわれまして、いや、お上の策略で、世間がなにやかや不満をいだいている時に、あらかじめ判っているその地点に、大々的な救出作戦を行う、

気のいい国民はたちまち関心をそちらへ向けてしまいます。

方法手段も、いろいろ手を替え品を変えて、海軍の陸戦隊が残っているとすれば、自衛艦を派遣したり、勝ち戦を信じさせるために旧軍隊のユニフォームを、いや軍服といわなきゃいけませんな、これを着せて一小隊を上陸させる、かと思えば、アメリカ本国に保存されている零戦を借りて、上空を飛んでみたり。

お上も、あれこれ絵柄に心を配り、マスコミにサービスをいたします。どうしても出て来ない連中には、大砲の空砲をドカンドカンと撃ち、いかにも反攻のための上陸作戦が始められた如く装いもした。何分、人だすけですし、いちおう各国とも軍人精神の権化とこれをみなして、残留旧日本兵には同情的でした。

そのうち行き過ぎたのでございます、調子にのったというやつで、いや、これも狙いのうちだったのかも知れませんが、自衛隊員をこの救出作戦に起用した。

ジャングルに分け入って、旧日本兵を探すという名目で、一実は南方における作戦の訓練をすることくらい、誰かが思いついて不思議じゃない。

ある島の旧兵士は、まことに頑強でして、いっこうに敗戦を認めようとしな、そればかりか、近づくと対し発砲をくりかえし、彼等は、小銃だけではなく機関銃、擲弾筒さえ所持していましたな、ドンドンバチバチ盛大に抵抗いたします。

現地だって、そうそう救出作戦を歓迎していたわけではない。ジャングルの奥底深くひそんでいればこそ、安全無害な連中とみなして、ほっといたわけ。

そこへ大々的に日本人がやって来て、妙な刺激を与えるもんだから、やがては現地人にも被害が及びます。するつてえと、もともと反日感情の底にわだかまっている地域だから、面倒くせえ、いっせあっさりナバームで焼き殺しちゃえというタカ派も登場して不思議はないですな。

由来、日本人は他民族の気持がさっぱり判らない、あくまで自分たちはヒューマニズムに立脚しておると、まるで手前のナワバリの如く南洋の島を荒しまわる、てんから現地人の感情おかまいなしです。

そして、ついに日本兵が現地警察に射殺されました。とたんに、内地の連中はいきり立った、「だからやだつてんだよ、開発途上国の連中は、説得つてことを知らない、すぐ殺しちゃもうんだから」なんていうのは、ハト派のうち、「日本人が殺されたんだ、何故、自衛隊はだまってるのか」「救出隊は、実弾を所持し、もし現地人に不穏な行動があれば、ただちに応戦するべきだ」なんてものすこいものまであらわれた。

そして、これは実行に移されました、旧兵士の射撃を受けた現地人が、応戦しようとしたとたん、自衛隊の六四式機関銃が火をふいた、単に武器だけをくらべたら、なにしろ世界七位の武力を有するのですから、南洋の国々はともかなわなない。

ない、苛々してくる。そこへ横井さんとか小野田さんがあらわれれば、旱天の慈雨てなもので、ジーンと涙ぐみ、ある人は生きのびたことがうしろめたいやら、精神力に感動したやらいっておりますが、結局のところ、日本民族の中にひそむ、すなわち自分の中にある好戦性をたしかめ、それが世間に受け入れられると判って、安心したわけでございます。

こういった風潮をすかさず見抜いて、内政の破綻を一方ではごま化し、また、あっさり懸案の、おおっぴらな再軍備を世間に認めさせたのでげすから、さすがコンピューターつきタンブ、いや、今では戦車と申すべきであります。え？ そんなに沢山、離島残置要員が、南洋に残っていたのかってんですか、そりゃあなた、真物は小野田小尉どまりつてえ話でございますね、後は、やはり中野学校生き残りの連中に、減食をさせ、先輩の指導を受けさせ、夜陰に乗り、こっそり離島へ送りこんだインスタント旧日本兵だつてえ話です。もちろん、軍国化への道が完全に築かれました後、ヘリコプターで全員無事救助されたわけでございますな。

その3 穴の島

もう何年前になりますでしょうか、南洋の島に穴を掘

とたんに、反日感情が爆発して、それぞれの国の都市で、大々的な抗日、毎日デモが起り、エコノミックアニマルの手先たちは、放火、暴行を受け、ついには死者も出る。なんたつて、日本はアジャの孤児てえくらしいのもので、いや、この表現は当りませんな、孤児ならむしろあわれな存在、まずは餓鬼大将でげしょう。いじめられている連中、みな手をくんで立ち上った。

日本は、鼻でせせら笑いましたな、援助資金の打切りとか、物資の輸出禁止とか、技術顧問団のひき上げという手段で、これに対抗した。

これが火に油を注ぐ結果となつて、在留邦人の大量虐殺が行われる、国内の、それまでは平和憲法死守とか、自衛隊海外派兵反対とかいっていた連中も、すっかりいきりたちます、どうも馬鹿は、と申しては馬鹿に気の毒、気違いの血はあらたまらないようとして、血書をもって自衛隊に志願する者もあらわれるし、もちろん兵器産業は国の援助をおおっぴらに受けて施設を拡大する。あつというまに歴史が逆にもどりはじめて、南方におけるわが權益を守ることは、当然の行為である、マラッカ海峡、バシー海峡の安全確保は、日本の生命線維持することだなんて、新聞の社説がおり立っています。

考えてみますつてえと、この一連の救出作戦はつまり、日本人の軍人精神探したつたんでございますな。うわべは平和平和と御題目の如く唱えておりますも、どうもしっくりし

つて、三十年の余も生きていた旧日本兵のことが話題になりましたのは。

あれはあれで、けつこう話題をよんだもので、やれ、士官だった者は、さすがに姿勢がいいとか、未教育の応召兵の態度に親近感をいだくなんてんで、アポロが月に着陸した時と同じく、この分野での評論家が出現したものです。

しかし、なんと申しましたも、最近の話題と申しますと、海外旅行へ出かけた日本人が、そのまま行方不明になつちまうつてございましょう。これは、いつ頃からじまつたかつてえと、旧日本兵さわぎの十年くらい後からでしょうかねえ。いや、その前からささしはうかがえたんですが、そう目立ちしなかつたと思ひます。

あの頃の時代の変化というものは、まことにすさまじいものでげたな、一時は石油危機とかで、オタオタした日本でしたが、そこはもちまえのねばり腰、ぐんとふんばつてメジャーやら、ドルの力やらに対抗しまして、なに石油が高くなるなら、それだけ生産性を高めればいいんだし、福祉の御題目を少し先きへのばせば大丈夫。

じゃんじゃか設備投資として、世界各国へ工業生産物を輸出し、ついにはGNP世界一位となりましたな、あの時の、国民の興奮ぶりは、今もあざやかに残っております。

火花がうち上げられ、提燈行列がくり出され、この日をGNPデイとして、祝日に制定し、GNP神社までできる始末。



彼等は、新鮮な果物やトマトを持参し、これはこの何年間か、日本人の口にしたことがない食物です。「あんなものを食べると、蛔虫がわく」「俺はあの味を知っているが、そりゃ味がきつくてくえたものではない」すべて水耕野菜にたより、ビタミンは錠剤で服用している日本人は、てんから彼等

一方、ヨーロッパと申しますと、まず大英帝国が、ストにつぐストであっさりギブアップして、弱小国の仲間入りをすする、ECもフランスのわがままに足ひっぱられて、思うようには運営できません、アメリカは国内問題、ソ連は食糧問題、中国は毛さん以後の政権争い、そして、開発途上国は相変わらず、軍事クーデターをくりかえし、未開発国は人口の爆発的增加により、ニッチもサッチもいかない。

まったく日本は神国としかいようありません、単一の民族、単一の言葉、ひたすら勤勉で、同族意識がつよく、うちてしやまん、進め一億火の玉だとばかり、世界中の国がおたおたする中で、ただ一國、未来を信じ、進歩をこそ美德と、突きすすんだのです。

全世界の主な重工業製品の生産は、日本がうけおっているようなもの、こうなると石油もじゃんじゃん入って来るし、エンこそが世界をリードする通貨でして、なにも日本人がいちいち外国へ出ていく必要はない。

すべて先方から、必要な製品の買付にまいます。なにしろ、日本人は外国が苦手ですし、また今さら観光の意味で、外へ出てみるもはじまらない。

たしかに遺跡は昔も今も残っているけれど、近代的な建築物、工場設備となれば、日本の方がはるかに上です。ミロのヴィーナスだって、ジョコンダの肖像画だって、日本がその気になれば、すぐ運ばせることができるのだから、誰も外国

へはいかなくなりました。

逆に、おどおどとおびえた眼つきで、日本へやって来て、しごく卑屈な物腰、商談すませれば、あわてて本国へもどっていく外人を、「あれだから駄目だつてんだよなあ」「そら、おびえきつてるじゃないか、まあ、無理もないだろう、工業大国日本の発展ぶりを眼のあたりにすれば」

外国の衰退ぶりを、TVの画面にながめては、酒くみかわし、日本人は繁栄を謳歌しておりました。たしかにアメリカもひどいものでした。USステイブルも開店休業でしたし、マンハッタン地区はゴーストタウンと化してしまったんだから。

花のバリは深閑と静まって、老人の他に姿はございません、ロンドンブリッジなど、いたるところくされて、今にも崩れ落ちんばかりの有様。

しかし、中には好奇心の強いものもいます、行く必要もない外国へ出かけて、さらに優越感をつよめて来る、「日本はたしかに世界の王者となった、これほど完璧な制覇を成し上げた国は歴史にないだろう」とほこらしく公言する。

外国へ行くと、日本人は敬遠というのでしようか、みな遠まきにしてながめるだけ、それは、占領軍をむかえて、おびえる弱小民族の態度にそっくりだったといえます。そのうちにかえって来ない連中のことが、噂されはじめました。

どこでもなく、消えてしまう。日本政府は、嚴重に調査

を依頼しましたが、なにぶん、世界に冠たるわがポリスとこととなり、ルーズきわまりないので、処置なし。「これはやはり外国のねたみによるものだろう、繁栄日本をやっかんのでことだ」「金目のものを狙ったのだろう、とにかく外国へなぞ出かけないことです」国民はいましめあい、せつせと仕事だけに打ち込む。

そのうち、外交官もかえって来なくなった、いくら外務省が訓令を発して、帰国を命じても、行方が判らない、これはいちおう国際問題になりました、政府間が交渉を重ねたのですが、この使節団が同じく帰ってこない。

外国には鬼が棲むか蛇がすむか、どうせ未開の国だから、まともにとりあっても仕方がないと、打切りになりました、まあ、経済的な交渉は電報電話でやりとりすりやすむことです。この頃からすな、外国から、野バン人そっくりの風態の、あれは宗教団体でしょうか、やってみまして、「成長戦争は終わったのです、さあ、自然にもどりましょう」なんていう呼びかけを行いました。

彼等は、新鮮な果物やトマトを持参し、これはこの何年間か、日本人の口にしたことがない食物です。「あんなものを食べると、蛔虫がわく」「俺はあの味を知っているが、そりゃ味がきつくてくえたものではない」すべて水耕野菜にたより、ビタミンは錠剤で服用している日本人は、てんから彼等

のいい分を認めませんでした。

時には、行方不明となった日本人もまじって、「お父さんお母さん、自然にもどって下さい、日本は残念ながら敗けたのです」、呼びかけましたが、そして両親はなつかしい息子の声にかなり心動かされたようですが、野バン人の中に入りこむだけの勇氣はありません。

あたしももちろん、そういった一人だったのです、ある時、街を歩いておりますと、前に見なれぬ姿の男がおりまして、あたしを手招きする、何気なく足を向けたとたん、ワツととびかかれ、手足をしばられて、気がつけば、古めかしい帆船に運び込まれておりました。

誘拐されたのかと、生きた心地もないまま、海を渡って、どうやら朝鮮半島らしいのですな、小供の頃にみたその地の民族衣裳を、人々は身にまとい、のんびり暮しております。

あたしは、たちまち何人もの人間にかこまれて、質問を受けました、「よくまあ、あんなところで生きていられましたね」「本当に、地球が自然へもどる運動をはじめ、日本以外すべての国が、産業革命以前の社会を目ざしていることを、知らなかったんですか」「何を食べてたんです、日本では」あたしはすっかり面くらしまして、衣食住について、いちいち説明し、そのつど、「何というタフネスだろう」「環境適応力があるんだなあ」「しかし、あの顔色をみると、皮膚もた

るみきってるじゃないか」いわれてみれば、あたしの肌の艶色、ひどくどす黒くよどんでいて、日本にいる時は気がつきませんでした、野バン人とくらべた時、死人同様といてもよかった。

あたしは藁葺きの小屋へ寝かされ、昔、日本でもちよいとはやったことのある自然食を与えられ、どうにか一年でまともな顔色にもどったのです。どうか日本の皆様、穴の中から出て来て下さい、高度成長戦争はとっくの昔に終わったのです、工業立国の神話を信じて、最後までたたかいつづけ、公書にも耐えた皆様の奮戦敢闘ぶりは、世界の人も驚嘆しております。ここに平地で育てた鶏の地卵と、露地栽培のトマトを置いておきます、これを味わってみれば、現在の不自然な生き方に、気がつきませう。

男は、呼べどもいっこうに応えない、まるで墓場のようなビル街に向けてさげんだが、誰も答える者はいない。つきそいのアメリカ人がいった、「やはりわれわれの服装がいけないのかも知れない。超近代的な衣裳と、道具をとりそろえて呼びかければ、安心して出て来るんじゃないかなあ」「あなたがたがやるべきですよ、アメリカは日本の直属上官だったんだから」男がいうと、アメリカ人は肩をすくめ、「いや、まことにうしろめたい感じで」と、つぶやいた。